

3. 鼎談 21世紀の方向性を示す 学院の基本構想決まる 危機意識の共有が課題に



21世紀の関西学院の方向性を示した基本構想が決まった。前執行部のとき策定作業が始まり、学外の関学関係者も含めて幅広い議論を重ね、まとめられた。その間に大学を取り巻く環境は厳しさを増し、競争、危機、淘汰、再編・統合、改革など深刻な言葉が大学の未来を揺さぶっている。基本構想が示されたのを機会に、山内一郎理事長、院長、平松一夫学長、宮原浩二郎副学長の3人に、21世紀の関西学院をどう描くのか、ざっくばらんに話し合ってもらった。(司会・構成は古森勲広報室長)

司会 基本構想は、競争時代を勝ち抜くための“パイプ”といえます。この基本構想をどう進めていけるのか、まず、宮原先生から。

本文をじっくり読もう

宮原 2月14日の理事会で基本構想が承認されました。学内外のグループに分かれたりして2年近く議論を重ねたのでしょうか。実施計画、即ちアクションプログラム(A P)という具体的な施策の詰めがありますが、本文テキストは固まったことになります。これを一つの転機として21世紀初頭の関西学院の方向性をきちっと見定めていこうということで、非常に重要な文書だと思うんですね。ただの紙切れにしてはならないということです。

山内先生と平松先生で理事長・院長、学長という関学の三つのトップポストがそろっております。それぞれに基本構想への思いを述べていただきたいと思います。

僕は企画室副室長を兼務する立場から基本構想のドラフトを編集させていただきましたが、基本構想はどちらかというと学院を外から見た目を重視して書かれていると思います。学外グループという呼び方が適切かどうかは別にしても、そのグループは、関西学院を外から見て、いろんな提言をし、危機感が足りないと強調しているわけです。もちろん学内グループの意見も、尊重すべき点がたくさんありました。でも、やはり学外から見て危機感を強調しているところが非常に胸を打ちました。

これは後でいろいろ議論が出てくると思いますが、基本構想はいわば理念的な内容が中心のため、抽象的な表現が多くなっています。これと連動したA Pでは、例えば数値目標があったり、具体策がプランニングされたりしています。それから大学の中長期計画、高中の計画、学院全体の計画が連動しています。しかし、ドラフトを書いた立場から申しますと、抽象的な表現であってもいくつかの方向性は明確に出したつもりです。そのことをみんなで共有していく必要があるんじゃないかと思います。

基本構想をちょっと解説させて下さい。「基本構想の必要性」では、まず基本的な認識として、戦後半世紀、学院は順調な発展をしてきたが、21世紀に入ったいま学院を取り巻く環境は大きく変わっていることを強調しています。これは関学だけではなく、日本のあらゆる大組織、大企業、有力私学も、みんなそうです。経済成長も止まっている。18歳人口も減っていくし、大学進学率も増えない。文部科学省の大学政策も護送船団方式から自由競争に移ってきている。国立大学も独立行政法人化されて、新しく

個性を出していくわけですよ。すごく大きな変化です。こういう競争の時代に立ち向かっていくキーワードが「選択と集中」です。

それから「英語の関学」も基本構想で選択されています。例えば6ページに『英語の関学』の名に恥じない教育プログラムを提供し、とあります。「英語の関学」というフレーズは非常にわかりやすく、アピール力もあって、強いブランド性を持っている。だからその名に恥じないプログラムを提供して、一層国際化を進めていくということは、選択され、強調されている点だと思います。

それから「(3) 社会性の高い教育へ方向転換する」ですが、9ページに「個々の教員が教えたい事柄をかつて自らが学んできた方法で教えているという現状を変えていかなければなりません。」と書いてある。これは、われわれ教員が昔大学院で勉強してきたそのままの方法で教えるのではなくて、ひところレジャーランドとやゆされた状況から、学生自身もそれぞれの個性に応じた力を身につけたいと変化してきているので、学生の目線に立って、『教員のための教育』から『社会のための教育』へ、そして『学生のための教育』へ転換が必要」とはっきり書かれています。教員のための教育じゃなくて、学生のための教育をやるんだと明確に打ち出しているんですね。

それから研究ですが、ひとことで言うとこれまでの関学には全学的な研究戦略がありませんでした。21世紀COEプログラムもそうですが、全学的にどういう体制を組んで、どこを強くして、どこに資源を投入すべきなのかということを含めてあまり考えてこなかったことが指摘されています。それをぜひやりましょうというのが「(4) レベルの高い研究成果をもって社会に貢献する」の項です。

それから「(5) 大学院を拡充し高度専門職業人を輩出する」はロースクール、ビジネススクールなど社会の複雑化、国際化で高い水準の教育が求められている。特にビジネススクールは「世界に通用するビジネススクール」をつくり上げ育てていくということが強調されています。これも選択されたものとして強力に進めていくことが、この項で打ち出されている。

「(6) 幹の太い総合学園を創り上げる」ですが、ここは実は二つ柱がありまして、一つはいわゆる中高大一貫教育の幹を太くするために、「当面の急務」として「一貫教育出身者の比率を他の有力私学の水準に引き上げる」と書かれています。これは有力私学では大学に占める中高出身者の割合が10~30%だが、関学は約6%。だからもう少し系列校なり提携校を増やすなり、あるいは別の仕方、とにかく一貫教育の出身者の比率を上げていこうということです。

もう一つ、大学のあり方についてですが、これまでの大学づくりを「私学としての特色を全面に出さない総花的な拡張路線、いわば『準国立化』への歩みを進んできた」と表現しています。どの大学も同じようにいろんな学部を増設して、オールラウンドに総合大学化してきたわけです。しかし、これからはこういう方向を漫然と継続していくことは許されません。「選択と集中」によって、関西学院の強みと弱みを見きわめて、その強みと可能性に資源を傾注していくべきでしょう。12ページから13ページにかけて「とりわけ文理融合の分野などで特色を出していくべきである」とあります。これは理念からして「ランパス博士の医療伝導への情熱にならい、たとえば心身の健康、生命の質(Quality of Life)など目に見える形で社会貢献につながる新たな分野を模索する必要がある」という形で、一つの方向性、考えるべきヒントが具体的に示されていると思います。

この基本構想を実現するために欠かせない「(7) 学院全体の責任あるリーダーシップ」ですが、この項の最初の一文「過去半世紀、日本の大学は比較的のどかな環境におかれていました。」は、実に本質を突いています。

比較的のどかで、あまり学校経営ということを考えなくても人口が増えてくるし、高校生も増えてくる。経済も成長していくし、進学率も高まっていく。放っておいてもある程度の知名度とブランドがあると、維持できてきました。

しかし、これからはそうはいかない。「学校経営の強化」がキーワードになってきます。関西学院の場合、「理事会を中心とする全学的リーダーシップを早急に確立する」と、理事会機能の強化がうたわれています。その具体策の一つは「学部長経験者や大学評議会から選出された者を理事会メンバーとし、その見識を十分に取り入れていく」です。かなり踏み込んだ提案であって、いまAPで具体的にどうするのか議論されています。

最後の「4 基本構想実施計画（アクションプログラム）について」ですが、基本構想があり、それに基づいたAPがあり、APと整合的な形で、大学や中高の中長期計画があり、危機感を共有しながら基本的な理念のもとに、学院全体の計画、学院全体の21世紀の構想をつくり、実行するとうたわれているのが基本構想です。

もう一度強調しますと、基本構想は確かに抽象的な表現が多いのですが、全体をじっくり読んでいただくと、かなり明確な方向性が出されていることがわかってもらえるはずです。

司会 基本構想を「紙切れにしない」という指摘は、学院構成員全員が心しなくてはならないことだと思います。そこでこの基本構想の推進役となる理事長と学長と宮原副学長の3人で、「紙切れに終わらせない」ためにはどうしたらいいのか、鼎談のかたちで討論をすすめていきたいと思います。

山内 まず、私の頭の中に「なぜ今基本構想か」という問いがあります。私は、20世紀はベルリンの壁が崩壊したときに一つの区切りをつけたと受け取っていました。そして、いま宮原先生も言われたように20世紀はすでに前世紀になったわけですが、確かに新しい世紀、まだわずかの年月しか経ってないが、状況の変化はものすごい。それを理屈じゃなくて実感として今受けとめている。では関西学院は、これからどういうふうな方向を選んでいったらいいのか、それが大変切実な問題になっている。

ですから、大学紛争のときの学長代行提案がありましたが、意味合いから言うと今回の基本構想ステートメントは同じ位大変重要な意味を持っています。大学ではよく100年の計を立てるといようなことを口にしますが、実際には10年の計もなかなか立てられない環境に私たちが置かれているなかで、差し当たり5年、せいぜい10年を視野に入れて、理念、経営、教学の三位一体的なとらえ方がミッションステートメントに反映している、あるいは反映させたいとの思いがありました。

学長とは、2年近く一緒に原案づくりの作業をしてきたチームメートという間柄ですね。ここには、個人の思い入れということではなく、関西学院にとって非常に大事な公共的な課題内容が盛り込まれています。

変わるものと変わらざるもの

平松 いま日本の置かれた状況、あるいは関西学院の置かれた状況は、非常に厳しいですね。山内先生がおっしゃったように、世界がベルリンの壁崩壊以降、いま直面している状況を見ても、国際情勢は非常に厳しいものがある、まさに文化なり文明なり宗教なりのぶつかり合いの時代に入っている。

そんな中で、日本は、関西学院は、と考えたときに、私は、ランバス先生が亡くなられたときのニュートン先生の追憶の辞をよく引き合いに出し

ます。それは、ランバス先生は常に時代の状況、事柄の状況に応じた柔軟な対応を、しかも実践的になさったけれども、同時に守るべきただ一つのもの、つまりキリスト教主義ということは守り通されました。変わるものと変わらざるものをきちっと峻別して現実的な対応もされ、しかも理念を保持されたわけです。

私どもはこの基本理念の中で、114年経た今日、ランバス先生の生きざま、精神をここに体現しようとしているんじゃないかなと思います。つまりこの激しい時代に、関西学院はぬるま湯的な体質だったかもしれないが、この大きな状況変化に関西学院としてあるいは関西学院大学として立ち向かおうとしている姿勢がここに出されていると思います。同時に光り輝く個性あふれる関西学院であるためには、キリスト教主義という理念は守り通さないといけない、そのこともきちっとうたわれている。

そういう意味で私は関西学院の伝統に依拠しながら、しかし新しい時代に、つまり21世紀初頭のあるべき関西学院を描くのにふさわしい形で、いまこうして基本構想がある。これをいかにして実現するかということも非常に大切なことだと思っています。

山内 ニュートン先生は追憶の辞のなかで「ランバス監督は、あらゆることにおいて革新的であったが、ただ一つの点で保守的だった」と述べておられる。それが、学長の言われたキリスト教の価値観に基づいて教育を推進するという姿勢ですね。革新的、保守的という言い方が適切かどうかは別として、ステートメント第2項の「建学の精神に立ち返る」です。

「立ち返る」について「消極的で、時代に何か逆行している」という声もありましたが、「立ち返る」については、昨秋、哲学者の鶴見俊輔さんと対談したとき聞いた「ランチの女王」というテレビドラマですが、若い男の子にギュッと抱きつかれてキスされた娘さんが、相手の腕を振りほどいてモノすごい勢いで後ろに向かって走った後、向き直って全速力で駆け戻ってきて男の子に頭突きして倒す。あれは非常によくわかるんですね(『K.G.TODAY』224号を参照)。ここでいう「立ち返る」は、温故知新をこえて、原点復帰が将来を開くという意味で積極的に受けとめたいと思うんです。

宮原 僕は、山内先生が会議で「立ち返る」の表現を解説されたのをよく覚えています。動きがあるという意味合いを込めて「立ち返る」という表現があって、返り立つのかもしれないですけども、何かパネのようなものとしてみんな了解するといいですね。

もう一つ、この「建学の精神に立ち返る」のところですが、ここはMastery for Serviceを中心にして「立ち返る」ということを訴えているわけです。これは僕の思いとしては、「信仰者であると否とにかかわらず」ということを強調したくて2回同じ表現を使っているんです。Mastery for Serviceは、関学の財産であり、価値理念であって、そこをみんなが問われていることを強調したかった。Mastery for Serviceというと、どうもクリスチャンだけのものであるというような理解をする人もいるようなので、必ずしもそうではないと思うんですが、ベーツ先生がキリスト教主義の理念を社会に「開き、問いかけた」と書かれています、いかがでしょうか。

平松 おっしゃるとおりで、関西学院大学という教育機関にとって、また仏教徒が多いと言われている日本では、キリスト教の信仰者であるか否かにかかわらずというのは、大切な意味合いを持つと思います。

関西学院で学んだ多くの人たちのほとんどはクリスチャンではない。でも、同窓会などに行くと、関西学院のキリスト教主義の教育を受けてきたことが、その後のその方々の歩みの上で大きな意味を持っているといわれ

ます。従ってクリスチャンにならないけれども、キリスト教主義の影響は強く意識して、生きざまの中に表れていると思います。

もっと具体的に言いますと、例えば私が影響を受けた先生の一人、会計学の青木倫太郎先生は、明確に仏教徒なんです。しかし、あの先生ほど私の学生時代にチャペルトークを体系的にたくさん話された方はいらっしゃらないですね。しかも学生には「チャペルに出なさい」といっておられました。当時はチャペル出席は、ほぼ強制的でした。

その教え子に高野山の第491世検教法印大僧正の静盛暁さんという方がいらっしゃって我々もよく高野山へ行きました。静さんはもう亡くなくなりましたが、青木先生につながる方々は、仏教の教えの中で、関西学院でキリスト教主義を学んできたことの意味をご自身の中でよく消化しておられたように思いますね。

もちろん関西学院の目指すところは、キリスト教主義教育ではありますが、この国でそれは必ずしもクリスチャンになるということの意味しない、なれば望ましいという思想はあるにしてもそれにはこだわらない。しかし、キリスト教主義教育の成果を上げていくということが大切な使命ではないかと思っています。

学院の責任主体は理事会

山内 キリスト教学校とかクリスチャンスクールというのは、クリスチャンが総人口の1%にも満たない日本では、非常にあいまいな、場合によっては誤解さえ招きかねない呼称なんです。そこで関西学院ではあえて「主義」という文言を入れているわけです。教育という最も厳粛な人間的な営みの根底に、創立時の学院憲法を引けばChristian principlesと複数になっていますが、つまり狭い教条的、信条的な意味じゃなくて、キリスト教的価値観、その中には人間と自然、歴史と文化あるいは倫理などいろんな問題が入るでしょうが、それらにかかわるキリスト教的プリンシプルを教育の公共的使命を果たすために一番必要な土台とする。それこそ主体的な選択ですね。

ですから「キリスト教主義」というのは、クリスチャンであるか否とにかかわらず、関西学院の教育的使命というものを一緒に担っていき、そういう共同の輪があって一体となる一種の旗印のような意味を持っていると思います。

ただ、この「主義」が排他的な原理主義になる可能性もある。ですからキリスト教主義という標語が災いする危険を避けるように注意しないといかんと思います。

もう少し追加させていただきますと、関西学院の寄附行為は「関西学院に院長の職を置く」と規定し、さらに、「院長は本学のキリスト教主義に基づく人間教育を推進する統括者」とあります。問題は、そういう役割を担った院長が機能できる仕組みが必ずしもはっきりしていない。従ってAPにも入っていますが、経営と教学の問題と並んで理念の問題、つまり基幹条項にかかわる部会を理事会の中に設け、院長をコンピーナーとして、理事会が責任主体として役割を果たすための機構をつくる必要があるというのが私の考えで、今後詰めていきます。組織とか制度というのは、平素あまり皆気にしないが、まさかのときにはこれが一番ものを言いますからやはりきちんと考えないといけないと思います。

平松 さらに追加的に。経験的に言いますと、例えば商学部は、日本の普通の考え方からいうと、神学部と対極にあるような関係なんですけれども、やはりキリスト教主義の関西学院大学にチャペルアワーがあるのは非常な



強みですね。もちろんキリスト教学があり、授業もありますが、毎日のチャペルアワーにキリスト教そのもののお話、あるいはそうでないことも含め、語る人の世界観なり人間観に接する中で、学生が在学中にずっと自ら考え、授業では得られないような機会があるのは、大きな意味合いがあると思いますね。

山内 商学部は神学部の対極にあるという考え方もできますが、今度立ち上げるビジネススクール（BS）の理念にもかかわるんですけども、聖書の価値観の中にはビジネスを非常に重視する考え方があるんですよね。だから、人間のビジネスと人類の本当のハピネスとを結んで考えるべきだと思うんです。そういう観点から、我々のルーツのウェスレーという先達は「Use of Money」「金銭の使用法」なんていう有名な説教をしているんです。それはむしろマテリアリズムじゃないんだけど、人間の所有や富の問題と宗教的次元の問題は、水と油の関係ではなくて本当は一元化されなくちゃいけないという主旨です。

関西学院がキリスト教主義に則る総合学園だということの意義は、そういう問題も含んでいます。サイエンスの問題も同じです。

平松 そのとおりで、後ほど出ると思いますが、例えばビジネススクール、ロースクールにしても、この理念に立脚し、深い人間性に基づいた法曹界の人間あるいはビジネス産業界の人間を育成していく必要があると強く認識しております。

宮原 第4代院長のベーツ先生が『商光』創刊号に書かれた「理想とするビジネスマンは…公共精神をもち、社会に対する強い責任感をもつ者である。…また、理想とする学者は、知的スポンジのような者ではない」を引用しましたが、ここでは具体的な職業としてビジネスマンと学者に言及しているんです。Scholarは「学者」と訳したんですが、要するにスポンジじゃなくて自分からきちっと社会へ向けて知識を発信していく人であるというのを言いたいのだと思いますね。

平松 そのとおりです。

宮原 そういう意味で、「建学の精神に立ち返る」ことによって現代の状況を考えていけば、かなりしっかりとした土台はあるように思うんですけども。

平松 Mastery for Serviceは、1912年にベーツ院長が新設の高等学部長に就任したとき、高等学部商科の学生に向かって語られた言葉なんですね。産業界で活躍されている卒業生の方々も、この理念があるから関西学院は非常に光るんだし、これをしっかり守ることが大切なんだということを強調されています。

山内 このServiceという英語がいま日本語として非常に薄っぺらな意味で使われているので、そこを乗り越えないといけないと思う。私は、時々学生諸君にMastery for ServiceのServiceの中身は、一人ひとりがいま立っている場所に向けて問われている事柄だと言っています。例えばMastery for JusticeとかPeaceあるいはLove。自分がいまここでどういうふうスクールモットーの意味を自分の言葉で表現できるか、その点で僕は宮原先生が2年前に編集された書物の貢献も非常に大きいと思うんです。みんながああいう対話を共有して、そして私にとってのMastery for Serviceをちゃんと納



得できて身につけないといかんとしますね。

国際化は最重要施策

宮原 Mastery for Serviceについては、また別の機会にじっくり話し合いたいですね。もう少し中身に入っていきたいんですが、例えば「英語の関学」。平松学長はどう進めようとしているのか聞かせてください。

平松 いま指摘されましたように、テキストの中に『英語の関学』の名に恥じない教育プログラムを提供し、より一層の国際化を進めていくことが欠かせない」と書いてあるわけですね。ただ、誤解してはいけないのは、英語イコール国際化ということではないということです。国際化を進めることと、英語とはかなり関連性は深いと思っております。つまり我々関西学院の卒業生が世界を舞台に活躍することを期待しているわけですが、そのときに情報も含めコミュニケーション・リテラシー、コミュニケーションの能力が非常に問われるわけですね。コミュニケーションは人間性も含めた技ですから、英語ができるということは、非常に助けになるわけですね。

伝統的に本学の場合には英語は強い。したがって、これから光り輝く関学であるためには、英語の一定水準は保証されているという教育を提供する必要がある。もちろんあわせて国際人たるには、価値観を含めた、幅広い知識、世界についての知識、専門的な知識が必要です。その意味で、包括的に関西学院を国際化させるための施策は、基本構想にもうたわれており、非常に大切な位置にあると私は認識しています。

山内 「幹の太い総合学園を創り上げる」という項目が12ページにあり、一貫教育の拡充が提言されています。人間教育とか語学教育というのは年齢の低い時のほうが大事なんですよね。理事会のメンバーでもあるオリックスの宮内義彦会長が、学生時代の話をしたときに、自分は関学の中学部で日本語が全然しゃべれないアメリカ人宣教師、それから実際はあまり英語をしゃべらない文法主義の日本人の英語教師、その2人から習った英語がものすごくプラスになった。だから、いま国際舞台でも活躍できるのは、中学部の英語教育のおかげだと言っていました。

それから、竹友藻風の息子さんの藤井治彦さん、この方は日本を代表する英文学者の一人ですけれども、彼も自分の英語力は、関学中学部のときに基礎が与えられたと言っているんですね。二人とも私のクラスメートですが、これは生きた証言です。

ですから関西学院も、幼稚園から小学校、中学校を抱える幹の太い総合学園を目指すべきだと思うんですよ。早稲田が英語に弱いと言われていたのを克服するために小学校をつくりましたが、これは教育論の常識からも正解だと思いますね。

それから学力が弱くなっているといわれるけれども、学力の低下よりもっと恐いのは人間として生きる力が非常に衰弱している。これでは本当に日本が滅んでいく、そういう危機感をみんなが持たないといけないと思います。だからこそ総合学園としての関学で英語のコミュニケーション能力だけじゃなくて、人間としての豊かさを培い、意志を鍛える。平松学長も同じだと思うけれども、中学部を出たときに英語で話すということに、心理的な不安は何もなかったですね。下手くそな英語でしゃべっているんだけれども、しかし外国人と接して抵抗は何もなかった。もう50年以上も前ですけれども。

平松 中学部に入学したときに、3年生がE S Sで英語をペラペラしゃべっているんですね。あれ見て「ああ、ぼくも3年になったらあのようになれるのか」と思ったものです。おおげさな表現ですがそういう人が目の前にゴロゴロいると、「あっ、ここで勉強したらそうなれるんだ」という一つの夢を与えてくれましたね。

宮原 それは、非常に貴重な伝統ですからね。

平松 そうですね。

宮原 いま山内先生のお話を聞いていて改めて思ったんですが、一貫教育の比率を高めるのは、経営基盤を盤石なものにするという意味合いがあると思います。しかし、それだけではなく、山内先生はよくAtmosphereと言われますけれども、人間教育で大事なことは、小さいころからある雰囲気の中で、よい雰囲気の中で育てられていくということではないでしょうか。僕なんかは、そういう過程を経ないで、バラバラな学校へ行っていましたから。それから考えると、中高出身者というのはうらやましい面もあります。自分で意識しなくても、ある種のスタイルを身につけられるでしょう。普通我々一人ひとりが自分で自分のスタイルをつくっていきなさいいけないんですけども、学校としてある程度の基本を与えてあげるということは、幼稚園ぐらいからやればかなりできますよね。その代わり関学の教育を信頼してくるわけだから、それにこたえる教育をしなさいいけないと思います。

「幹の太い総合学園を創り上げる」ということは、単に財政的なことではなくて、教育理念上必要であるというようなことだと思いますね。

山内 中高出身者が、何か「我々は中高出身だぞ」といったような特権意識を持つのは間違いで、かえって害になります。むしろ、少数派だけれど自分たちが学生として関西学院大学をよくするんだという責任感を持ってほしいですね。しかし、今は大学生総数に占める中高出身者は6%ぐらいですから、大学へ入ったら1万7千人の学生大群のなかに拡散し消えてしまっている。

平松 そういう意味では、そこに書かれているのをさらに充実させた一貫教育を、ぜひ実現させる必要があると思っています。

司会 いまは6%ですが、例えば3年後とか5年後とかには何%にするんだという数値目標はあるのでしょうか。もしあるなら何%にするのかおっしゃっていただけませんか。

平松 2桁パーセントは必要でしょうね。一気にというのは難しいけれども……。

山内 慶應は学生数の30%を学内進学にもってゆくとっていますね。

平松 長期的にはかなりいけるとおもいますが、短期的に一気に30%はどだい無理。

山内 ランバスリーグの姉妹校提携があるでしょう。私個人的には、これだけじゃなくてメソヂスト系の学院が西にも東にもいくつかあります。早稲田は四つ高等学校を持っているんですね。そしてその一つをモデル校に

して課外活動に力を入れる。法政も、今まではお荷物だった付属高校がいまや宝になってきています。近くでは同志社も国際高校を含めて三つ、四つかな、ありますね。

ですから、できたら5年ぐらいをめどに、もう1校か、2校、全国的に提携校ができればいいのになと思います。

平松 同感です。

司会 魅力ある学院づくりのための「選択と集中」とはどうあるべきでしょうか。

山内 言語コミュニケーション文化研究科が大学院に登場しました。「英語の関学」を標榜するなら各学部のカリキュラムに加えて全学横断的な英語教育を言コミが提供するやり方もある。さらに踏み込むなら言コミを学部にしてもいいと思うんです。国際言語学部とかいうような学部です。ここでは授業もゼミも全部英語でやる。そして全学生が取れるようにし、例えば午後4時半から7時ごろまではそういうコースがずっと開講されていて、リベラル・アーツを復権させた英語による教育をする。そこでは留学生が2割ぐらい占めていいと思う。ここでしっかり教養を身につけ英語が自由に使える学生たちが、ロースクールへ、ビジネススクールへあるいは神学部にも、それぞれ進学する。そうなると国際派のプロフェッショナルが養成できる。

平松 それに関連して具体的に、いま大学としても考えているんですが、国際教育センターづくりですね。これが、いま理事長がおっしゃったことと直結しています。私は、大学の最重点施策であろうかという認識をしています。

いま言コミの話が出ましたが、言語コミュニケーション文化研究科と言語教育研究センターと国際交流部との関連などあって、まだ整理できていない部分があるんです。でも、考え方としては国際教育センターを立ち上げて、そこではすべて英語の授業が提供されるというものです。

ビジネススクールの考え方の中にも、プレ・ビジネススクールと呼べばいいでしょうか、大学院ビジネススクールへ入る前の講義として、学部レベルでそういったものを幅広く学ぶことによって、英語のビジネススクールで学びやすい環境をつくるということの必要性がうたわれています。その点は、いま山内先生がおっしゃったことと重複する部分があるわけですが、そういう形で本当に英語に強い関学をつくるためのしっかりした仕組みをつくりたい。

繰り返して言いますと、国際教育センターを立ち上げて、そこできっちりした教育をする。恐らく全国的に見てもそんなに多くないと思います。いまのようなグローバルな時代には、関学を受験しようという学生にとって非常に魅力的な教育の仕組みになると思いますね。早い時期に実現させたい構想です。

山内 その方向を選択してうまくいっているのは、国際基督教大学です。規模は小さいけれども、非常に評価が高い。関学は総合大学だから、別の利点があるんですけどもね。国際基督教大学を内包するようなカリキュラムの仕組みを考える。そしてビジネスパーソンや弁護士、社会福祉士、あるいは牧師でも、ジャーナリストでもとにかく関学出身者は国際舞台で信頼され役に立つという伝統を新しくつくっていかなければいけません。

平松 宮原先生とも話したことがあるのですが、それは関学の最重点施策です。

宮原 最重点施策は国際化ですね。総合大学の利点を生かすということなんですけれども、学部の再編成みたいなものを学長はやりたいといっておられましたね。

山内 そうなんです。ただ、いまはにっちもさっちもいかないから、差し当たり全学横断的な、早朝とか夜の8時ごろまで授業してもいいと思うんです。学部の授業が終わった後、どの学部の学生でも取れる共通の授業を開講するんです。職業教育をしてもいいし、NOVAのような英会話学校に行かなくても、キャンパスで語学をマスターできるようにする。

魅力ある学院づくりとは

宮原 学生たちにとって魅力的な大学にするために選択がある。いまグローバルな競争社会といわれる一方で、他方で成熟社会の可能性がある。成熟というと最近のイメージは暗いけれども、人類史的に見ると、現代のような豊かな時代が続いていることはかつてなかったのです。そこには当然いい意味の成熟ということはあるはずで、平均寿命もものすごく長くなりました。高齢化は悪くばかり言われますけれども、必ずしもそうじゃなくて、みんながみんな長生きできるという人類史的にみれば異常な、昔では考えられなかったような時代になっている。しかし、どんどん新しい問題が出てきます。この長い人生をどう充実させて生きるのか。日野原重明さんが75歳以上を「新老人」といって、社会に大きなインパクトを与えました。

基本構想に「心身の健康」「生命の質 (Quality of Life)」という言葉が入っていますが、例えばターミナルケア、ホスピス、生きがいの問題は、関西学院にとって非常に親近性のあるテーマで、ぜひやりたいという声が強いです。僕自身の思いを言えば、そういう成熟社会に対応するような社会貢献は関学にとって魅力のあるテーマではないかと思うんです。

山内 大学だけじゃなくて、学院全体として生涯学習センターをつくる。ピカッと光る生涯学習センターができると思うんです。同窓や保護者も巻き込んで、新老人、75歳ぐらいまでを対象にしてね。学院のスタッフだったら、すぐに100ぐらいの講座は開けると思うんです。関学会館を活用したり、夏休みは校舎丸空きでしょう。サマーコースをどんどん開いて、高齢期にもう一度関学のキャンパスで学べるのがまたうれしいですね。何かそういうプログラムを総合的に大学で考えていったらどうでしょう。

平松 ようやく生涯学習の取り組みが本格化してまいりまして、答申が昨年まとまりました。これから取り組みが始まります。山内先生が言われたような息吹は検討の中で出てきておりまして、さまざまな形で関西学院が生涯学習に貢献しないといけないという認識が芽吹きつつあります。

ただ、具体的なプログラムでは、おっしゃるような躍動感があるようなプログラムはないんですが、今、宮原先生がご指摘のように、関西学院らしいプログラムは提供できると思います。今年4月18日に東京で開講される朝日カルチャーセンターの講座など、一つの小さな種ですけれども、その第1号になり得るということですね。こういうものを関西学院全体としてきちっととらえて、さらに発展させていく。特に仕組みとして発展させていく必要があります。今おっしゃったような分野は、まさに関西学院の

成り立ちから考えても、ぜひ必要な面だと考えております。

山内 その生涯学習の中にボランティアをトレーニングするプログラムを入れると、関学らしさがいっそう強まります。古いお稽古ごとの延長線上じゃなくて、あるいは趣味のレベルじゃなくて、日野原先生の新老人運動じゃないけれども、学生も同窓も、みんながそのセンターでボランティアとしての訓練を受ける。そして、関西学院を新しい時代の新しいボランティア運動の拠点にする。これは非常に大きな教育的、社会的意味を持つのではないのでしょうか。

宮原 そうです。だから東京で開講している関学講座を一つの突破口にして、制度的に、それこそ学部レベルまではいかなくても、学科単位でもいいんです。例えば健康科学や社会福祉などもある。特に健康とかクオリティ・オブ・ライフという分野を関学として全面的に取り組んでいくという姿勢がいま求められています。

平松 今の話で具体的なのは兵庫県のオープンカレッジですかね。それを体育の先生方が集中的に担当してくださっている。千刈ではお年寄りが参加しておられて、非常に喜んでくださっているんですね。我々の大学にはそういう基盤があるわけですから、そういうものをさらに生かしていくことも大切かなと思います。

宮原 身内をほめるわけじゃないんですが、世間的な信用が関西学院は高いと思うんです。

山内 そう思いますね。

宮原 仮に関学出身のお医者さんがいたら信頼度は高いと思うんですよ。そういうことは夢かも知れませんが、だんだん準備できるような体制にもっていくことが大事かなと思いますね。

山内 選択の中に医学部が浮かびますが、これはリスクが大きすぎると思いますね。しかし、例えば淀川キリスト教病院のようなところと連携し、社会福祉学科があるんだから、そこで実際の訓練ができる。そうしたら資格を得たい人が門を叩いてくるんじゃないかと思いますね。

司会 お医者さんの世界では、いま倫理面が強調されてきています。そういう教育なら関学の得意とするところですよ。

山内 私もある国立病院の倫理委員をしており、お医者さんの学会のようなものすごい討論に参加しています。初めは煙たがられていたのですが、このごろは「山内委員、どうですか」と発言を求められます。いい勉強になります。確かに、これから倫理が問われるえらい時代になってきますね。

平松 それは医の世界に限らず、ビジネスやローのような専門領域でも倫理観は求められるわけですから、関西学院はそういう意味では理念がしっかりした大学ですから、それを強調してすぐれた専門家を育成するという使命を果たしていけると思います。

合意形成にスピードつか

司会 話題を変えたいのですが、私は学院へ来て1年になるんですが、なにをやるのもスピードが遅い。これでは時代に取り残されてしまうような感覚になるんですね。世間から隔絶したような雰囲気は教職員の意識に問題があるんじゃないかと思うんですね。世の中のテンポとずれてくると研究や教育にも影響がでてくるのではないのでしょうか。この基本構想を進めていく上で教職員の意識の持ち方について語り合っていただけませんか。

山内 状況の変化に伴う危機感を共有できれば、単なる自己主張じゃなくて自ずと一緒を考えていく姿勢が出てくる。たとえば理事会に教員の代表が入ることについて、反対する人もいるけれども、「なるほど一考に値する」と賛成する人がでてきているし、ビジネススクールやロースクールも学長の足を引っ張るんじゃなくて、サポートしていこうという、合意形成が少しずつできる雰囲気になってきたんじゃないかと思うんですけども。

平松 ただ、ゆっくりなんですね、その変化が。仕方ないと思いますね。文化は一度できるとそう簡単に変わるものじゃない。関西学院も、長い平和な歩みを続けてきただけに、急に意識がコロッと変わることは考えられないんですね。しかし、基本構想が出てきて、いろんなところで基本構想を実のあるものにしようという努力が継続的になされれば、考える人たちも多くなっていくと思います。そして、今おっしゃったような教授会あるいは大学評議会も徐々にではありますけれども、いわゆるリーダーシップとか、「選択と集中」とかいうことの重要性が議論され始めています。

ちょっとそれもスピードが遅いと思われるかもしれませんが、今まではそういう議論はなされなかったと思うんですね。それと基本構想にある「選択と集中」について、学長が何か言ったら、「今までのやり方と違う」と反発が来る。しかし、その反発そのものも議論のいいきっかけになるんですね。そういった摩擦や反発を通して少しずつ意識変化というふうに結びつけていくことができるだろうというふうな期待しております。

ですから、基本構想に書かれているような迅速な意思決定という動作は、すぐにできるとはいかないというやや悲観的な部分もあるんですが、しかし、着実に動かしていくことはできるだろうというふうな思っております。

宮原 いや、僕も同じです。理事会機能の強化については、具体的な青写真がありますね。

山内 理事会機能の問題については、昨年すでに別刷りで「理事会機能強化について」というステートメントを出しましたので、そこにだいたいポイントを盛り込みました。

いわゆるガバナンスの確立が求められているわけです。今、学長も話されたように関西学院にはボトムアップの文化ができています。そのいい面はもちろんあるわけなんで、一挙にトップダウンに変えると、非常にまずい。どうしたらソフト・ランディングができるかをみんなで考えなくてはなりません。そのためには、まず忍耐が必要です。2年や3年で何もかも変わることは不可能だと思うんですよ。3年目ぐらいにやっというんなことが動き出すのではないのでしょうか。

基本構想にも書かれていますが、経営と教学が対置関係、いわんや対立関係であってはならない。私もその一人なんですけれども、通常教員の関心や意識の中心は、自分の研究教育条件がいかによくなるかぐらいのところだと思うんです。ですから、どういうふうな理事会機能を強化していく



か。関西学院の理事会メンバーは、21人で陪席者を入れるとかなり膨らむんですけども、このごろは理事会で理事全員が発言する雰囲気になってきました。しかし、機能的には常務委員会とか本部会議とは別に理事長、院長、学長、副学長が定期的に来てコミュニケーションの実質化を図ることが非常に大事だと思うんです。そのことと理事会の機能強化が結びついてくると思うんですね。そういう仕組みも含めて、これから夏までに中身を固めて、寄附行為の改正を伴うなら手続きをクリアーし、来年4月から実施したい。

平松 私も同じ意見です。別の視点でいいますと、大学は組織が大きいし、影響力も大きいわけですよ。教授会にしても大学評議会にしても、ここで意識変化というのは非常に大事です。前例主義とか他人依存とか、先送り主義とかいういわば病のようなものが日本中にはびこっています。関西学院大学がそうであってはならないと思います。

ただ、残念ながら部分的には こういう表現はよくないんですが 既得権益を守るとか、快適な大学教育、教員にとっての環境を維持するとか、そういう視点でされる発言もないとは言えないと思うんですね。ですから意識変革が大事なんです。ただ、意識変革は大事だと言ったって、そう簡単には変わらない。意識変革を促すような事柄、仕組みをつくる必要があります。我々は、最近よく競争原理といいます。研究費にしても競争原理で配分すると、よくいうことで既に部分的には研究推進機構で導入している。競争というと、ものすごい反応があるんだそうですね。特に反対という意味での反応があることを感じます。しかし、そのことは一方でそんなにも意識がまだずれているということの表れですね。

日本の大学だけでなく、企業はいまものすごい競争にさらされており変革しつつある。企業だって従来は護送船団方式、とりわけ銀行なんかはそうだったわけですね。大学は、今まさにそこから脱却しないといけないことに直面していますが、意識はなかなか変わらないと思いますよ。

アジアの大学を見ても、今ものすごい競争の中で、日本の大学よりはるかに実力をつけている。この現状を見たときに、日本の大学がこのままでおれるはずがないと思うんですね。ましてや関西学院大学がこのままでおれるはずがない。そうすると意識変革を促すためにも、学院の仕組み、あるいは予算制度の中に、少なくとも研究については競争を促すような仕組みを導入しないと、意識変革しなさいといったってできるはずがない。そういう仕組みづくりを理事長と一体になって考えていかなくてはなりません。

教育に品質保証の仕組みを

宮原 今のお話とつながるんですけども、すぐれた大学というのは研究ですよ。研究というのは抜かせないポイントです。「21世紀COEプログラム」で全国の大学がCOE狂想曲に踊らされたと言われていますが、開学でも本当にパタパタしました。COEは、5年後もあるし、その次の5年後もあります。それにも備えなければなりません。

そういう中で、大学は研究という柱と教育という柱の両方がありますけれども、僕の理解では、関西学院大学としては両方やることを選択したと思うんです。両方だと選択になってないんじゃないかという意見もあるかもしれないし、確かにどちらか一つといえば教育が絶対の基本なんです。しかし、関西学院としては2、3のピーク、即ち非常にすぐれた研究拠点は欲しい。そこを選択したということをはっきりしています。

平松 そうですね。ですから、そのピークの部分は競争的な部分であって、そこに資源を投入するということをしなないといけない。教育についてもめりはりがあったらもちろんいいのですが、むしろ研究の部分に競争的な原理でもって資金を投入するということは、これから求められていると思うんですね。学内よりもむしろ社会から求められていますね。

山内 宮原先生は国立のご出身だけれども、COEというのは、私は初めからあれは国立大学が主になると思っていました、財政的にも、人的にも圧倒的に有利ですから。だけれども私学でも今おっしゃるように研究推進の選択と集中のなかでピークをつくる。そこに、重点的に予算をつける。

それからさっきの意識改革のことですけれども、教員の間には関西学院が私学だという意識が平素あまりないんですね。学院の予算は75%が学費に依存してるんです。このままじゃ不健全です。が、とにかくわれわれ教職員は、いわば学生に養ってもらってるわけです。ところが学生の目線に立つことをおろそかにして、自分たちの業績主義に陥る、これがやはり問題なんですね。

研究面では、できるだけ外部資金を獲得しないと私学はやっていけないと思います。

平松 いまおっしゃったように、教育の個々の大きな事柄は基本構想には書いていないかもしれませんが、地道な事柄として教育の大切さは書かれています。そして、我々としては、関西学院大学を出た学生には、例えば産業界で求められている水準は保証するということまで教育の質を高める必要がある。

そのために従来からも、学生の授業評価、ファカルティ・ディベロップメント、それからシラバスを作成する、あるいは採点基準を客観化、標準化するというようなことも含めた教育の仕組みづくりをし、教育の品質保証が必要になってきます。

いま言ったようなことは、かなりの部分で実行されていますが、さらにそれをきちとした形で充実させていくという努力は継続して行う必要があります。そのことによって関西学院の教育が社会的に信頼されるわけです。この努力は、教員の意識変革も含めて取り組む必要があると思っています。

宮原 だから、教育と研究というのも無関係じゃないですよ。さっきピークと言いましたけれども、研究が世界につながっているところが必要だと思うんです。それがあって、キャンパスに世界的な研究者がウロウロしているのはいいですね。本当に学問している人、本当に研究している人の持っているオーラみたいなものは、そのキャンパスに伝わってくると思うんですよ。そういう意味で世界的な研究拠点をもつことは教育にとっても重要なことだと思います。

山内 偉大な研究者は、その存在そのものが教育に結びつく。

宮原 そうです。そうなんです。世界的な研究者が関学会館のポプラで食事しているだけでも違うんですよ、雰囲気。

平松 それは学生にものすごく影響があるでしょうね。夢を与えますし、その背中を見ながら成長していくんですよ。

宮原 ただ、旧帝大みたいに、もう何でもかんでも世界水準ということは

必要ないと思うんですけども。

平松 この研究に強いから関学に行って学びたいというような大学にしないといけないですね。

山内 僕が40年前に留学したデューク大学は、ノースカロライナのダラムという田舎町にあります。だけど魅力があるんですね。医学部が強い。医学部は全米ランキングで毎年5位以内に入っています。神学部もよかったです。ノースカロライナ州立大学も名門ですけども、メソヂスト系私大のデュークがいいというわけです。

関西学院も「阪神間に関学あり」という存在感が外に出ないといけない。そのためには、学院内の一体感がものすごく大事ですよ。学生たちの文化、スポーツの振興によってもそれこそ一体感がつくれますね。これは前から平松先生が言っておられます。

平松 これは教育の重要な柱になっていると思います。正課にスポーツや文化的なものがありますが、課外活動としてのスポーツや文化は関西学院の伝統の中で非常に大切な部分であり、それが活躍することが関西学院の非常に大切な部分であると認識している同窓はずいぶん多いですね。事のよしあしは別として、そういう事実があるということのをわれわれは知らなくてはなりません。

とりわけ今おっしゃったように関学に一体感をもたらすためには、それこそ立命館大学はアメリカンフットボールで日本一になったことがいかに大切かということをしきりに強調されまして、少し悔しいんですけど、本学もこれまではそのことを享受してきたわけです。これからの関西学院ではスポーツとか文化活動でもまた「選択と集中」が必要かもしれません。何でもかんでもというわけにいかないんで。しかし、課外のスポーツや文化活動が持っている教育的な意味合いというのを強く再認識する必要があると思います。

私は単にスポーツが強い、文化活動が強いというんじゃなくて、そういうものがこの関西学院、あるいは関西学院大学にあり、それに直接かかわっていることによって得られる教育的効果、さらに他の学生に与える教育的効果は、場合によれば教員が授業、あるいは人格的な接触によって与える教育的効果よりも大きなものを持っていると認識しています。

そういう意味では、スポーツ、文化を振興させ、隆盛に向かわせる施策が大切だということの認識を共有できれば、そしてそのための具体的施策に結びつけることができれば非常にいいのになと考えております。これは短期間のうちに何とか着手しないとイケない。

スポーツ推薦 本気で検討を

山内 スポーツ推薦では商学部が先頭切っていると思うけれども、あれだけではやはり限界がある。それこそこれは一貫教育の一つの柱ですけども、今の高等部一校では規模が小さ過ぎて、ラグビーも、サッカーも、野球も、アメリカンまでやろうといたら、大変です。

うらやましいのは、私学では早稲田と慶應はものすごいライバルでしょう。そこへ早稲田実業のようなモデル校からラグビー、野球など三つか四つの特別枠で、8人から10人ぐらい入るんでしょう。関学も、原田の森キャンパス時代、神戸高商と関学の高商が競えたので、名選手を輩出したと思いますよ。

平松 そのことは入試部を中心に検討してもらいたいと思っていることの中にいます。学力以外のすぐれた能力によって関西学院全体の学生にいい影響を与えて、関西学院大学を活性化できるような学生を確保する仕組みをつくる必要があると思います。それも全学的にやらないと効果は出ませんね。ですから、学部の特性で変わってきますが、全学的に重要性を認識してもらって仕組みをつくる。そうすることによって関西学院全体の一体感が強まり、卒業生も母校に愛着を強く持つことができるんですね。

これ、すぐに実現させないと、私学としての関西学院、伝統ある関西学院の存在をさらに強くすることはできないのではないかと考えています。

山内 アメフトが関西一になったから甲子園ボウルに出る。その新聞報道があった日の朝なんかは、学生たちが何となくうれしそうな顔をしている。キャンパスを訪れて学生の表情を見たら、その学校が生きてるか死んでるか眠っているか、すぐわかりますね。この前東京のある大学へ行ったけれども、学生たちに全然生気がない。死んだ魚の目みたいにトロンとしてね。

うれしいのは、関学は阪急やJRに乗って通学して来んですが、みんな楽しそうにキャンパスライフをエンジョイしている。それが伝わってくるからうれしいですね。これがなくなって、学生や教職員みんなの表情が暗くなったら、もう関学は滅びます。それは講義、ゼミ、それから課外活動、教職員のオフィスすべて同じだと思うんです。

平松 そのとおりですね。

宮原 そのとおりですね。だから、キャンパスは宝なんですよ。ここでちょっと基本構想のテキストに戻りますが、『基本構想』の必要性に「危機の時代はまた、機会の時代でもあります。」(2ページ)と書かれてあるところです。ここはグローバルな競争の時代にいかに打ち勝つかということを強調し、それに続いて「成熟した市民社会にふさわしい豊かさや優しさ、リベラルな国際性とバランス感覚、快活で賢明な人間性」とあるのは、関学の持っているよさ、スクールカラーを表現しているんです。これもすごく気に入っているんです。関学の同窓会とか、サークルに参加する機会が増えたんですが、いろんな同窓の方、先輩とお会いしても、関学カラーって明らかにありますね。ある種の快活さ、センス・オブ・ユーモアというのは、絶対に失ってはいけないと思うんですよ。

あまりギスギスして競争、競争といって心が貧しくなっちゃうようでは、何のために阪神間の私学として関西学院があるのかわからなくなってしまふ。山内先生、このへんをどうお考えでしょうか。

山内 これ大学の大衆化、マスプロ化の宿命なんですよ。1万人を超える学生を要する大学というのは、今おっしゃったようなスクール・カラーや雰囲気を見現するのがなかなか難しい。だから、具体的にはたとえば上ヶ原キャンパスの中央芝生を美しいキャンパスのぜいたくなスペースとしてキープするだけでなくもう少し生かしたらいいと思うんですよ。春とか秋のいい季節には芝生を盛んに使って、チアリーダーが参加して校歌を歌いあげ、そのときには学長が学院教育の理想をアピールする。あるいは、総合コースにある関学講座のようなものを、もう少し大々的にやったらいいと思うんです。そうすることによって卒業式とか入学式でしか聞けない学長からのメッセージを何度も聞くことができる。アメリカのカレッジでは、学長自らが講座を開くとか、あるいは定期的に学長アワーを設けたりしていますね。だから、宮原先生がおっしゃるように、豊かさや、国際性をど

のようにして身に付けさせていくか。校歌でも、スクールモットーでも、現役の学生にはなかなか身につかない。どうせマンモス大学だからもうあかんといって諦めたら、それこそ開かんで、どういうふうにしたら開くかということ、本気で具体的に考えたらいい。

平松 基本構想に書かれているようなことを維持するには、やはり目線というか、ステーキ・ホルダーというか、教職員だけの目じゃなくて、外からの目ですね、そういう人たちの要請というのは、まさにこういうことを維持してほしいという期待感が表れていることが多いんです。そういう人たちと意見交換するなかで、要望を反映するような学院にしていくことは大切なですね。

より具体的には、象徴的に甲子園ボウルなんですね。同窓も、甲子園へ来て同窓会をする。学生はあそこへ行って一体感を体験する、校歌を歌う。もう身震いするような感動を体験する。甲子園ボウルは典型的で、そういう場をたくさんつくっていく。いま理事長がおっしゃったようなことも含めて、そういう肌で感じる経験が、このごろ少なくなっているんじゃないかな。そういう機会は学問や講義の中はもちろん、課外活動、さまざまな宗教活動も含めたすべての活動の中にどうやってつくったらいいのか、少し考える必要があると思いますね。

山内 私は、有力な同窓が多数おられるから、もっと協力してもらわないといけないと思うんです。大学と広報室が共催して、社会的評価が高く、みんなが知っている卒業生をゲストに招いて、新入生を対象にした特別レクチャーやシンポジウムをシリーズで毎月開く。50歳半ば以上ぐらいで、いろんな実績のある人たちは、母校に対する熱い思いを持っている。

平松 啓明学院中学校は、関学の先生方を呼んで生徒に話を聞かせたりするんですね。大学としては、いまおっしゃるような何か話を聞きたいと思っているような同窓を講師として招き、シリーズで講演を打っていく。そうすることで、いま宮原先生が指摘されたような感覚を持った学生が、きっかけをつかむんじゃないかという気がしますね。

宮原 ぼくが教員になってもう16年ですけども、関学のいいところは、ある種の明るさなんですね。学者だからこうだというような、あまり深刻になっているのは似合わないんですよ。僕はそれでいいと思っていて、関学はぜひそういう明るさを維持するべきだし、明るくて軽快でリベラルで、バランス感覚があって、豊かで優しくってという、そこがいいところだと思うんです。誰でもここにきたら安らげてまた元気になるような学園をつくっていったらいいですね。

山内 元気の出るKGでないといかんです。

平松 そうですね。

西日本のリーダーをめざす

宮原 この基本構想がめざす関西学院像は3ページの一番上にある「関西学院が名実ともに西日本を代表する総合学園として社会に貢献し、世界的な評価と信頼を得ること」に要約されています。「名実ともに西日本を代表する」というのは、関西学院の命名の由来ということでいろんなところに出ていますよね。空の翼、それから手帳にも書いてあります。もともと

「くわんせい」と読んで、当時のおしゃれな表現です。必ずしもいまでいう関西地域だけじゃなくて西日本の全体を意識した命名なんです。

山内 Western Japanです。

宮原 Western Japan。確か上ヶ原に移転したときも、ベーツ先生あての手紙にもありますが、当時のレターヘッドをみると、関西学院はWest Japan Collegeだったんです。だからその志は必ずしも単なる「関西」じゃなくて、少なくとも西日本という広域を視野に入れていました。東京を重視するというのも、東京から発信しないと西日本のリーダーであるということも認知されないということがある。東京から学生や人を連れてくるということではなくて、東京を活用して、広域的、全国的な知名度を確立するということです。

最も正統な表現としては、もともと名前からして西日本のリーダーとなるということにつけられたのだから、それを通して世界的な評価と信頼を得るという書き方だと思うんですけども、このへんはいかがでしょうか。

平松 まさに同感です。そのためには、ここに書かれている理念的なテキストの部分は理解を共有する。それからアクションプログラム、これから策定される中長期計画ですね、これを一つひとつ確実に実現していきさえすれば、そしてその積み重ねをすれば、間違いなく西日本を代表する総合学園となり、社会に貢献できます。

宮原 「Mastery for Serviceを掲げる」を入れたほうがよかったかもしれないですね。

山内 今はやりの言葉でいえばグローカリズムということで、国際化とグローバル化、このコンセプトをいっぺんきちんと整理しないといけないと思うんですね。いま国家そのものが制度的に疲労している。日本の国家意識なんていうのも、昔からあったわけじゃなくて短く狭いものです。今や世界丸ごと考えていけないような時代にあるということと、それから阪神間と三田に関学のキャンパスがあるということ、それがやはり弁証法的に結びつく視点をもたないとだめだと思うんです。

宮原 全く同感ですね。

山内 それからAP（アクションプログラム）の問題ですね。いま学長も言われたけれども、これはあくまでAPであって、UPになったらそれこそunpreparedペーパーに終わってしまう。だからUPにならないためには期限と優先順位をきめる。やっと今私たちがアクションプログラムに踏み込むスタートに立ったわけです。勝負はこれからなんです。基本構想ができ上がったといってホッとしているわけには絶対いかない。これから立ち上がって理事も教職員も、みな役割を担ってもらい一体となってAPを一つずつ項目別実施してゆかねばなりません。義務感だけじゃだめです。それぞれの施策にワーキングチームをつくって、みんながコミットして一緒にやっていく必要があると思います。

宮原 だから、APはなるべく項目が少ないほうがいいですよ。その代わり必ず実現させるんだということですね。

平松 これは21紀初頭ということではあるけれども割と中長期のビジョン

なんですよ。ですから、各年、単年度ごとにも具体的に今年はこれを重点的にやるということを、計画として落とし込んでいく。その意味では、そのときそのときは、項目は少なくなるでしょうね。

山内 ロースクールにつづく一番先頭は、ビジネススクールですね。

平松 短期的にはそうなりますね。

山内 理事会機能の強化も早くしないと間に合わない。

平松 それから、大学としての国際化の進展は非常に短期間のうちに具体案を策定して、2003年度の最重点項目とする。

宮原 やはりこういうのは、資料を見なくても頭の中に入っているぐらいがいいんです。そういうことをめざして作業を進めていくということですね。

平松 そうですね。

司会 どうやら集約されてきました。どうもありがとうございました。

『K. G. TODAY』 No.225 2003年 4月15日 から転載